

「反戦主義者」末永敏事のこと

私は昨年度の本誌への投稿で内村鑑三の詩歌四編を紹介し、うち歌一首「欲うこと成らぬは成るに増すめぐみ砕けて悟る十字架の道」について、これは「病める若い友を慰むる辞」として中島静江という女学生（私の恩師山本泰次郎夫人晴子の姉）に宛てた手紙であり、更に付言として内村が司式をした「静江の結婚の相手は末永敏事」と言い、…現在、彼の評伝が長崎新聞に連載中」と記した。

この連載記事は昨年秋季に完結、年末には「二〇一六年度平和・協同ジャーナリスト基金賞・奨励賞」を受賞、この度その書籍化が成って、森永玲著『反戦主義者なる事通告申上げます―反軍を唱えて消えた結核医・末永敏事』（花伝社、二〇一七年七月二五日）とし刊行された。この優れた評伝をぜひ読んでいただきたいと願いつつ、ここに前稿の続きとして、もう少し（内村との関係を主とし、紙幅の許す限りで）この末永敏事という人物について語ることをお許し下さい。

まずこの本の「序章」は次の一文で始まるが、これが彼の生涯を一言で尽くしていると言えよう。「長崎県の島原半島・北有馬村今福生まれの末永敏事（一八八七～一九四五）という医者がいて、世界の難敵だった結核を

研究する先端にいたが、公然と反軍を唱え、敗戦のころ死んだという。そのまま世に知られることなく、年月のかなたに埋もれた」。

末永は一九〇一年（以下一九を略す）地元の中学を退学して単身上京、青山学院中等科に入学、在学中に内村門下となったと思われる。

一二年に長崎医学専門学校を卒業して医師となり、短期間台湾の病院で働いた後、一六年アメリカへ留学、シカゴ大学その他で主として結核菌の抗酸性に関する研究（後に日本で博士論文）に従事して、二五年に帰国した。

恐らく内村が引き合わせたと思われる二人の結婚式を司った内村は、その日（二六年六月二日）の日記にこう記している。「末永は角筈時代よりの弟子であって、医学者として米国に十年留学し、信仰を守って今日に至った者である。中島は過去八年間の忠実なる聴講者であつた。純粹なる信仰的結婚であつて、彼らの幸福と共になれら一同の幸福を祈った」。

『内村鑑三全集』（岩波書店、一九八四年）には、末永宛の内村の書簡が七通収録されている。その最終信は二九年十二月二八日付、代筆による葉書で「…小生もどうやら健康を維持して居ります。天職の有る間は生命安全と信じます。君の新たな御事業（故郷における医院開業か？）の上に神の祝福を祈ります」とある。内村の

永眠がこの後わずか三か月（三〇年三月二八日）、しかもこれが数少ない彼の最終書簡の一つであることを考えると、師内村の弟子末永に対する愛と信頼がいかに深くあったかを思わせるのだが、では反対に師に対する弟子のそれはいかなるものであったかを示すものは、残念ながら皆無に近い。内村永眠二年を記念するある雑誌に残された「内村先生のクリスチャンセンス」と題する一文に、その敬愛の一端を窺わせるのみである。

三三年二月、末永故事と静江は突然離婚した。静江と三歳になる娘範子は、静江の父小島滋太郎の籍に戻り、敏事もまた故郷島原半島から姿を消す。彼の生涯はここに一転した。

その後末永は三七年には茨城県で内科医院を開業、次いで三八年八月に賀川豊彦の推薦によって、白十字会鹿島保養農園に入職した。

当時既に日中戦争に突入していた日本政府は、三八年国家総動員法を施行、これを受けて「医療関係者職業能力申告令」が出されたが、入職したばかりの医師末永敏事もこれを求められたのであった。彼は十月四日付で茨城県知事宛に以下のような回答書を郵送した。「医師職業能力申告の徴集勤務の療養所医師として、入所の除隊兵及兵士家族に必要な書類作成の如き事項に当面し、平素所信の自身の立場を明白に致すべきを感じ茲に拙者が

反戦主義者なる事及軍務を拒絶する旨通告申上げます」。直後末永は茨城県特高に逮捕され、「基督教信者の陸海軍刑法違反被疑事件」として送検、翌三九年三月水戸地方裁判所において裁判が行われた。自ら進んで自分は反戦主義者と名乗り出た末永であるのに、彼はその原審控訴審のいずれにおいても、認否を含めて一切弁明も証言もすることなく、禁固三か月の判決を受けて、収監された。刑期満了後出所したとみられるが、その後の彼の消息は再び分からなくなる。

今や思想犯の出獄者となった末永が医師として働くことができたとは考えられず、彼はどこで、どのようにして生き、また死んだのであろうか。常時特高の監視下に置かれていたことは確かかのようにだが、その死についてとなると、これは森永著書においてもなお「第六章 謎」とあって審らかではない。戸籍によれば、「末永敏事は一九四五年八月二五日、東京の清瀬村で死亡した」となっているという。獄死説、病院での、あるいは行路病死説などいろいろあるようだが、決定的なことは不明である。また故郷北有馬村の末永家の墓地に彼の名の刻まれた墓はないという。

末永が内村に就いた頃、内村は日露非開戦の主張である「戦争廃止論」をはじめ「平和の福音―絶対的非戦主義」（以上〇三年）、「戦時における非戦主義者の態度」、

「非戦主義者の戦死」(〇四年)などの論考を次々と発表して、その絶対的非戦平和主義を展開していた。

末永の反戦主義がこの師の非戦論に培われたものであることは言うまでもないだろう。師の死後間もなくに満州事変を嚆矢として戦争の時代に突入していく祖国を目前にして、彼は既に期するところあって妻子を離別し、前述のような次第で反戦反軍の行動に出たのであろう。さらに敏事が記した論考や詩を見ると、宗教的根拠による平和思想や文明批判はまさに内村譲りであり、その信条に迷いは感じられない。

皮肉なことだが、彼を苦しめた当局の「特高月報」には、彼がこの行動に出る以前に早くも以下のような彼の平和思想を雄弁にも語る言葉を周囲の人々(保養農園の職員など)に伝えていたことが記録されている。「日支事変は支那から仕掛けられて居るのではなく日本から仕掛けた侵略戦争である。現在日本の政治の実権は軍部が握って居る。軍部の方針は世界侵略を目指して居る。今度の戦争は東洋平和の為であると言うて居るが事實は侵略戦争である。戦争は御神意に反する事であるから戦争に賛成することは日本が亡びることに賛成する様なものだ」「小生軍備全廃論者なるが故に陸海軍人団と関係あることを嫌ふ。次に平民主義者なるが故に特権階級例令は皇室、貴族、富豪と何等の関係あるを拒絶する」(特高月報、一九三九年一月)。

また彼の送検の容疑の中には、天皇批判の不敬罪容疑も含まれていたという。

追 末永敏事については、高木謙次『高木謙次選集』第六巻・戦時下無教会信徒の動向(キリスト教図書出版社、二〇一六年)に「末永」の項がある。
『森永著書』の帯には「特定秘密保護法、共謀罪の時代に問う!」とあった。

(所載) 『みぎわ』五七

浜松聖書集會 二〇一七年十月